

# いわゆるシリア＝キリキアグループと暗色磨研土器の地域性

## —ルージュ盆地の調査成果からみた一考察—

小高 敬寛

The So-called Syro-Cilician Assemblage and Regional Varieties of Dark-faced Burnished Ware:  
A View from the Rouj Basin.

Takahiro ODAKA

土器新石器時代研究において、暗色磨研土器という語はいわゆるシリア＝キリキアグループの示準遺物を指す固有名詞として定着しているが、これまでは資料不足による実態の曖昧さからか、字面どおりミガキ調整された暗色系の器面をもつ同時代の土器に対してことごとく使われるきらいがあった。しかし、近年増加した資料にもとづき、ルージュ盆地でみられる土器の変遷と他遺跡の資料を比較すると、その編年観を適用しうる地理的範囲はアムク平原やラタキアおよびイドリブ近郊に限られた地域に過ぎない。暗色磨研土器が土器新石器時代を通じて卓越するのはこの地域のみであり、少なくとも土器アセンブリッジからみればシリア＝キリキアグループに一体性は乏しく、その概念は地域的多様性の観点から再考を迫られる。

キーワード：暗色磨研土器、土器アセンブリッジ、シリア＝キリキアグループ、ルージュ盆地、地域性

Dark-faced Burnished Ware (DFBW) has been regarded as an index of the so-called Syro-Cilician assemblage in the Late Neolithic of the Near East. The term DFBW has been extensively applied to contemporary ceramics with attributes such as burnishing and dark-colored surfaces. However, a comparative study of developments of ceramic assemblages from the Rouj Basin and the other Syro-Cilician sites, based on the recent information, indicates that the homogeneous nature of these developments was limited to regions such as the Amuq Valley, Latakia and Idlib. In addition, the predominance of DFBW occurred only in those regions through the Late Neolithic period. The results suggest that the ceramic tradition included regional varieties even at the Syro-Cilician sites, and this fact necessitates reconsideration of the Syro-Cilician assemblage.

Key-words: Dark-faced Burnished Ware, ceramic assemblage, the Syro-Cilician assemblage, the Rouj Basin, regional variety

### 1. はじめに

ここで扱う暗色磨研土器とは、Dark-faced Burnished Ware の訳語であり、1953年にブレイドウッド (R. J. Braidwood) らが初めて用いた言葉である (Braidwood and Braidwood 1953)。彼らによってトルコ南東部アムク平原の調査報告書第1巻が刊行されると (Braidwood and Braidwood eds. 1960)、同じくブレイドウッドが提唱した「シリア＝キリキア (Syro-Cilicia)」グループの文化的概念 (Braidwood and Braidwood 1953; Braidwood 1954, 1955) と相まって、広く学界に定着した。この語は単にミガキ調整された暗色の器面をもつ土器を指すわけではなく、西アジア、とりわけ北レヴァント地域からキリキア地域の土器新石器時代に特有な一群の土器を指す、固有名詞である。また、シリア＝キリキアグループは、暗色磨研土

器の主体的な出土を最たる特徴とし、打製石器など他の物質文化においても共通性が高いとされる遺跡群に対して名づけられた (cf. 三宅 1995)。該当する時代は人類史上の画期といえる農耕牧畜の開始 (先土器新石器時代) と都市形成 (銅石器時代) との過渡期にあたり、生産経済の成熟を背景に定住的な集落が拡散し、後に都市文明が興るメソポタミア低地の開発が始まる。その経過を考古学的文化の時空間的な遷移からつぶさに跡付けていく作業において、暗色磨研土器はそれに寄与する有力な資料の一つであり、また、シリア＝キリキアグループも時空間的な枠組みとしての可能性から注目すべき概念といえる。

本稿では、従来シリア＝キリキアグループとされてきた地理的範囲、すなわち北レヴァントからキリキアにおける暗色磨研土器の地域的な相違について、学史的背景から生

じている問題点に留意しながら論じる。その方法として、シリア北西部ルージュ盆地の地域編年をもとに土器の変遷を概観したうえで、他の遺跡の例と比較・検討し、ルージュ盆地の土器編年観がどの地域にまで適用可能なのかを探っていく。そして、描き出された暗色磨研土器の地域性から、シリア＝キリキアグループの概念と有効性について言及してみたい。

## 2. 学史的背景と問題の所在

現在の学界で暗色磨研土器と呼ばれている土器のなかには、数が多いわけではないが、その名に反して淡黄色や橙黄色といった明色の器面を呈するものが含まれている。また、同じ時空間的範囲には、やはりブレイドウッドらが命名した暗色非磨研土器 (Dark-faced Unburnished Ware) と呼ばれる一群の土器が存在する (Braidwood and Braidwood eds. 1960)。暗色磨研土器との決定的な違いは器面がミガキ調整されない点にあるが、暗色磨研土器のなかには器面のごく一部のみミガキ調整の施された例が多数あり、実際のところ完形で遺存していることがきわめてまれな新石器時代の土器資料において、両者を明確に区別することは非常に難しい (cf. Tsuneki et al. 1999: 8)。したがって、言葉そのものの意味においても、同定作業の実情においても、暗色磨研土器という呼称は混乱を招きかねず決して適切とはいえない。しかし、半世紀にもわたって広く学界に定着した用語であるが故に、変更も軽々にはし兼ねるといのが現状であろう。

そもそも、この用語が問題を孕みつつも長きにわたって使われ続けてきた背景には、研究史上の脈絡がある。ブレイドウッドの示したシリア＝キリキアグループやその準遺物たる暗色磨研土器の定義、およびその後の動向については三宅 (1995) に詳しいが、ここで改めて簡単に振り返ってみたい。

先述したアムーク平原の報告書は1932年から38年までの調査をまとめたものであるが、その成果はブレイドウッドが暗色磨研土器やシリア＝キリキアグループの概念を唱えた際の最たる資料であった。1953年に始まるこの提唱は、そもそも西アジア先史文化の大きな地域的枠組みを措定することに起因していた (Braidwood and Braidwood 1953)。しかし、ブレイドウッド本人による翌年の論考では、実証的なデータの積み上げからその範囲を定める作業に苦慮している様子が早くも窺える (Braidwood 1954)。暗色磨研土器はその作業を進める際の主たるメルクマールとされたわけだが、それはブレイドウッドの壮大な構想を支えるために、広い地域にみられる共通性を示す手段であった。ここで確認しておきたいのは、暗色磨研土器という固有名詞がその主体的出土をもってシリア＝キリキアグループを

同定するメルクマールとして生み出された以上、その適用範囲は標準資料たるアムーク平原の暗色磨研土器と同一視できる資料のみに限定すべきという点だ。ブレイドウッドが最終的にあげたシリア＝キリキアグループの遺跡は、アムーク平原の諸遺跡に加え、ラス・シャムラ (Ras Shamra) 遺跡、ユムクテペ (Yumuktepe) 遺跡、ギョズルクレ (Gözü Kule) 遺跡などに過ぎない (Braidwood and Braidwood eds. 1960: 501-505)。ただし、それにいたるまでの一連の論考 (e.g. Braidwood 1955) から察するに、彼はまた暗色磨研土器のみに依存する危険性を懸念し、石器インダストリーなど考古学的文化の多角的な実態解明の視点からも慎重を期していたがために、試行錯誤を繰り返し、シリア＝キリキアグループの適用範囲を短期間のうちに幾度も改めたように思える。

アムーク平原の報告書刊行以後は、近隣における新石器時代遺跡の発掘が停滞し、新たな資料の増加に乏しい状態が続いた。したがって、アムーク平原の出土資料は、もちろん土器を含めてシリア＝キリキアグループの標準資料として扱われ続けたわけだが、その内容を補強あるいは比較・検証する機会にほとんど恵まれなかったのも事実である。結果として、暗色磨研土器は限られた実資料に拠ったまま、北レヴァント地域からキリキア地域の新石器時代という広い時空間に特徴的な遺物とされてきた。さらに、その実態の曖昧さからか、暗色磨研土器という用語はブレイドウッドが示した範囲を越えて、パレスティナからアナトリア東部にまでいたる広範な地域の新石器時代遺跡から出土した、字面どおりミガキ調整された暗色系の器面をもつ土器に対してことごとく使われるようになった。また、それらは常にシリア＝キリキアグループと結び付けられて考えられるきらいがあった。

しかし、1970年代後半からは、この濫用ともいえる事態を危惧し、暗色磨研土器に代わる用語が提案されたり、あるいはより厳密な適用を促す意見が出されたりしはじめた (Moore 1978: 301; Copeland and Hours 1987: 403)。1990年代に入ると、ブレイドウッドの示した本来のシリア＝キリキアグループに当たる地理的範囲内でも、暗色磨研土器の資料がにわかに増加した。まず、イドリブ市の南西側に広がるルージュ盆地 (図1) において、1990年から92年にかけてテル・アレイ (Tell Aray)、テル・アブド・エル＝アジズ (Tell Abd el-Aziz)、テル・エル＝ケルク (Tell el-Kerkh) の3遺跡が試掘調査された (岩崎・西野編 1991, 1992, 1993; Iwasaki and Tsuneki 1996; Iwasaki and Tsuneki eds. 2003)。このうちテル・エル＝ケルク遺跡では、1997年から本格的な発掘調査が進められている (Tsuneki et al. 1997, 1998, 1999, 2000, 2007)。また、1950年代から70年代にかけて実施された、ラタキア市近郊の

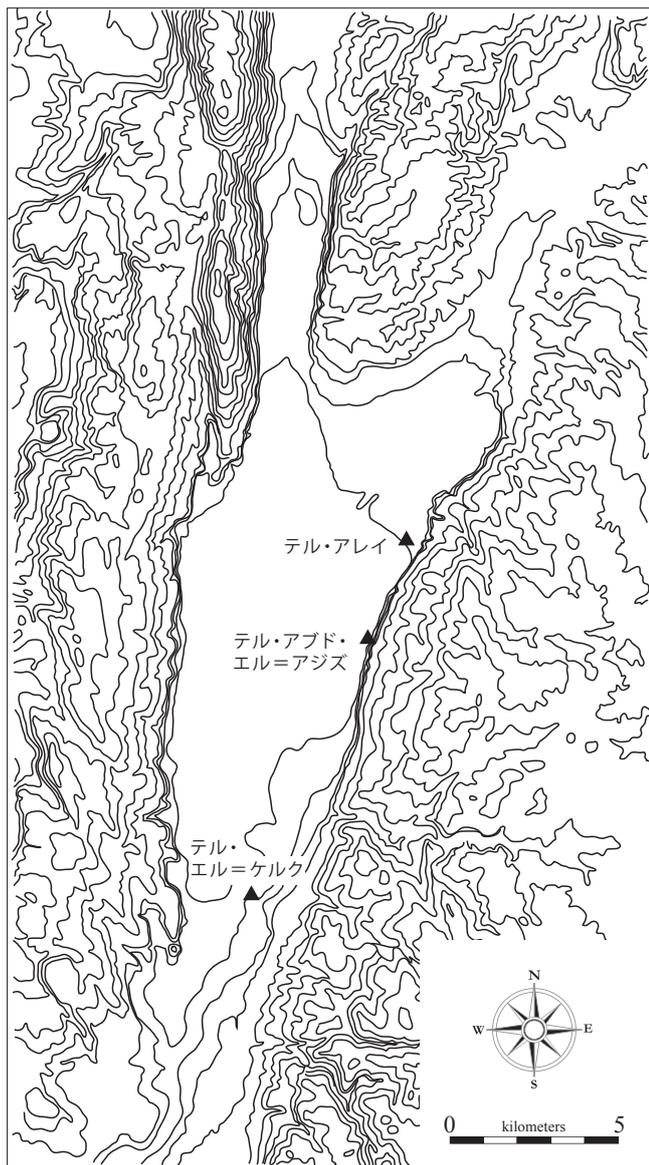


図1 ルージュ盆地内で発掘された新石器時代遺跡の位置 (Iwasaki and Tsuneki eds. 2003: Fig. 2を改変)

ラス・シャムラ遺跡における先史時代調査の報告書が、1992年になって刊行された (Contenson ed. 1992)。シリアではさらに、ハマ市近郊のシール (Shir) 遺跡で2005年より発掘が実施されている (Bartl et al. 2006, 2008)。いっぽう、キリキア地域でもメルシン市近郊のユムクテベ遺跡が1993年より再調査され、1930年代後半に発掘された資料も含めて新たに分析が行なわれた (Caneva and Sevin eds. 2004; Balossi 2004; Balossi-Restelli 2006)。

先述のように、ブレイドウッドがあげたシリア＝キリキアグループの遺跡は限られていたが、昨今の資料増加はより多くの遺跡間での比較・検討を可能にし、すでにアムーク平原で示された編年観 (アムーク編年) の見直しが図られるはじめて (e.g. Balossi 2004)。なかでも、ルージュ

盆地で継続的に調査を実施している筑波大学シリア考古学調査団は、1992年までの3遺跡における試掘成果をもとに独自の地域編年 (ルージュ編年) を提案し (常木 1993)、その編年観にもとづいた土器の変遷は三宅裕によって詳述された (三宅 1997)。さらに、1997年にシリア文化財博物館総局と合同で開始したテル・エル＝ケルク遺跡の本格的な発掘調査では、層位的な帰属が明らかな口縁部片だけでも2万点を優に超える膨大な土器資料が出土しており、ルージュ編年を補強し、精細化するうえで大きな貢献が期待される。筆者は1999年より調査に参画し、2003年にはそれまでの成果を加味しつつルージュ編年に則した土器装飾の変遷をまとめた (小高 2003)、その後も調査は継続されており、東トレンチなど新たな発掘区からの出土品 (小高 2009b) も含めて、資料はさらに増加している。

### 3. ルージュ盆地の土器編年

ルージュ編年に従えば、本稿の対象である土器新石器時代にはエル＝ルージュ2期が相当する。エル＝ルージュ2期は2a～2d期の4期に細分されている。ここでは、基本的に1992年までの出土資料に基づいた三宅の土器編年に準拠しつつ、1997年以降の発掘調査や検討結果から得られた新たな知見を加え、一部修正して概要を述べてみたい。なお、絶対年代にかんする補足資料として、テル・エル＝ケルク遺跡で近年得られたエル＝ルージュ2期の放射性炭素年代を表1にあげる。

#### エル＝ルージュ 2a/2b 期

現在判明しているかぎりにおいて、ルージュ盆地で最古と思しき土器アセンブリッジはエル＝ルージュ2a期ののものであるが、唯一テル・エル＝ケルク遺跡2号丘6～5層で確認されているに過ぎない。隣接して同じくテル・エル＝ケルク遺跡を構成する一遺丘、テル・アイン＝エル・ケルク (Tell Ain el-Kerkh) 遺跡でさえ、3つの発掘区で先土器新石器時代層と土器新石器時代層の双方が検出されているにもかかわらず、エル＝ルージュ2a期の文化層は確認できていない<sup>1)</sup>。2a期の詳細にはいまだ不明な点が残るいっぽうで、続くエル＝ルージュ2b期にかけての連続的かつ漸移的な土器の変化は確認できる。エル＝ルージュ2a期から2b期の放射性炭素年代は、1990年代初頭に数点測定されたものの、良好な結果が得られなかった<sup>2)</sup>。ただし、前後 (エル＝ルージュ1期と2c期) の測定結果から、較正年代 (以後同様) で前7000～6600年頃と推定されている (常木 2007)。

エル＝ルージュ2a期の土器アセンブリッジは、ほぼ半数ずつ占めるケルク土器 (図2: 1-6) と暗色磨研土器 (図2: 7-14)、そしてわずかな粗製土器 (図2: 15) から構成される。

表1 テル・エル＝ケルク遺跡で得られた土器新石器時代の放射性炭素年代

発掘区・時期／層位	試料採取位置	試料の種類	year bp	Lab. no.
中央区・Ⅰ期	Str.221, E271	炭化物	6950 ± 50	NUTA2-2105
中央区・Ⅱ期	Str.240, E271	炭化穀粒	7230 ± 40	NUTA2-2104
中央区・Ⅱ期	E270-290	炭化物	7420 ± 45	NUTA2-2089
中央区・Ⅲ期	Str.167, E310	炭化木材	7670 ± 45	NUTA2-2023
中央区・Ⅲ期	Str.167, E310	炭化木材	7730 ± 80	NUTA2-2024
東トレンチ・2層	Str.604, E273	炭化物	6815 ± 20	UCIAMS-21690
東トレンチ・2層	Str.612, E273	炭化物	6985 ± 25	UCIAMS-21691
東トレンチ・3層	Str.621, E272	炭化物	6980 ± 30	UCIAMS-21687
東トレンチ・3層	Str.621, E272	炭化物	6990 ± 25	UCIAMS-21688
東トレンチ・4層	E273	炭化物	7005 ± 25	UCIAMS-21692
東トレンチ・4層	Str.626, E272	炭化物	7125 ± 25	UCIAMS-21689
東トレンチ・5層	Str.622, E274	炭化物	7450 ± 25	UCIAMS-21697
東トレンチ・5層	Str.608 下部, E274	炭化物	7450 ± 25	UCIAMS-21695
東トレンチ・5層	Str.608 下部, E274	炭化物	7460 ± 25	UCIAMS-21685
東トレンチ・6層	Str.625, E274	炭化物	7225 ± 25	UCIAMS-21696

ケルク土器は暗色磨研土器の祖型あるいは古手の一種とされる土器であり、胎土に多量の小礫が混和され、器面は灰褐色を呈することが多く、外面は軽いミガキあるいはまれにナデ、内面はナデで調整される。器壁は厚さ10mmを超えることが多く、器形は口径15cm内外の単純な半球形の鉢形に限られる。口縁は単純口縁でわずかに外反する場合があります。底部は平底の破片がみついている。暗色磨研土器は、器面が暗褐色から赤褐色でケルク土器より暗い色調を呈し、ていねいなミガキで調整され、胎土には鉍物が混和される。器壁の厚さはおおむね5～7mmと比較的薄い。確認できるかぎり、器形はケルク土器と同じく単純な半球形の鉢形のみである。口縁は6層のものはすべて単純口縁(図2: 13, 14)が出現する。粗製土器はスサが大量に混和された明色の土器であるが、破片が多く全体の器形はよくわかっていない。装飾に注目すると、6層では粗製土器に赤色ウォッシュが施される例が2点だけ認められるものの、基本的に出土土器はすべて無文である。しかし、5層では爪形文や刺突文をもつ暗色磨研土器(図2: 10-14)が登場し、わずかではあるが粗製土器に白色プラスタを塗布した土器も現われる。ただし、6層の赤色ウォッシュが施された粗製土器とともに、プラスタを塗布した土器は上層からの混入の可能性が示唆されている(Miyake 2003: 126)。

次の時期とされるエル＝ルージュ2b期の土器アセンブリッジは、テル・エル＝ケルク遺跡2号丘4～1層、およびテル・アイン・エル＝ケルク遺跡の北西区2～1層と東トレンチ8～7層で検出されている。なお、テル・アレイ遺跡2号丘11～5層については、従来エル＝ルージュ2b

期として捉えられていたが(常木 1993; Iwasaki and Tsuneki 1996; 三宅 1997)、最近ではエル＝ルージュ2c期とされている(Iwasaki and Tsuneki eds. 2003: 193-194)。概報を参照するかぎり、ケルク遺跡の2b期に顕著な突帯や暗色磨研土器の外面を覆う爪形文の存在(岩崎・西野編 1991: Figs. 14, 15)から、筆者には11～9層を2b期、8～5層を2c期とするのが妥当のように見える。9層と8層のあいだに間層が挟まされていることも、この推定に対し肯定的な事実であろう(岩崎・西野編 1991: 26-80)。ただし、上のような2b期の特徴をもった土器片の点数や割合は明記されておらず、また、この発掘調査は地山まで達していないことから、これらの土器片が発掘停止面より下方の層から混入した可能性も拭いきれない。

この時期の土器アセンブリッジは暗色磨研土器(図2: 16-23)を主体とするが、ケルク土器は減少し、やがて完全に消滅してしまう。また、粗製土器は相変わらず少ないものの、徐々に土器アセンブリッジ中に占める割合を1～2割程度にまで増す。若干のケルク土器を伴い、粗製土器の割合がきわめて低いテル・エル＝ケルク遺跡2号丘4層、テル・アイン・エル＝ケルク遺跡北西区2～1層および東トレンチ8層を2b期の前葉、ケルク土器をまったくもしくはほとんど伴わず、一定量の粗製土器を伴うテル・エル＝ケルク遺跡2号丘3～1層とテル・アイン・エル＝ケルク遺跡東トレンチ7層、そしておそらくテル・アレイ遺跡2号丘11～9層を2b期の後葉、と細分することができる(cf. Tsuneki et al. 1998: 12-14)。暗色磨研土器には粘土の貼付による耳状把手(図2: 23)や粘土帯を貼付して形づくった突帯が多々みられ、頸部をもつ壺形の器形(図2: 20, 21)が登場する。装飾は爪形文(図2: 19, 22, 23)や刺

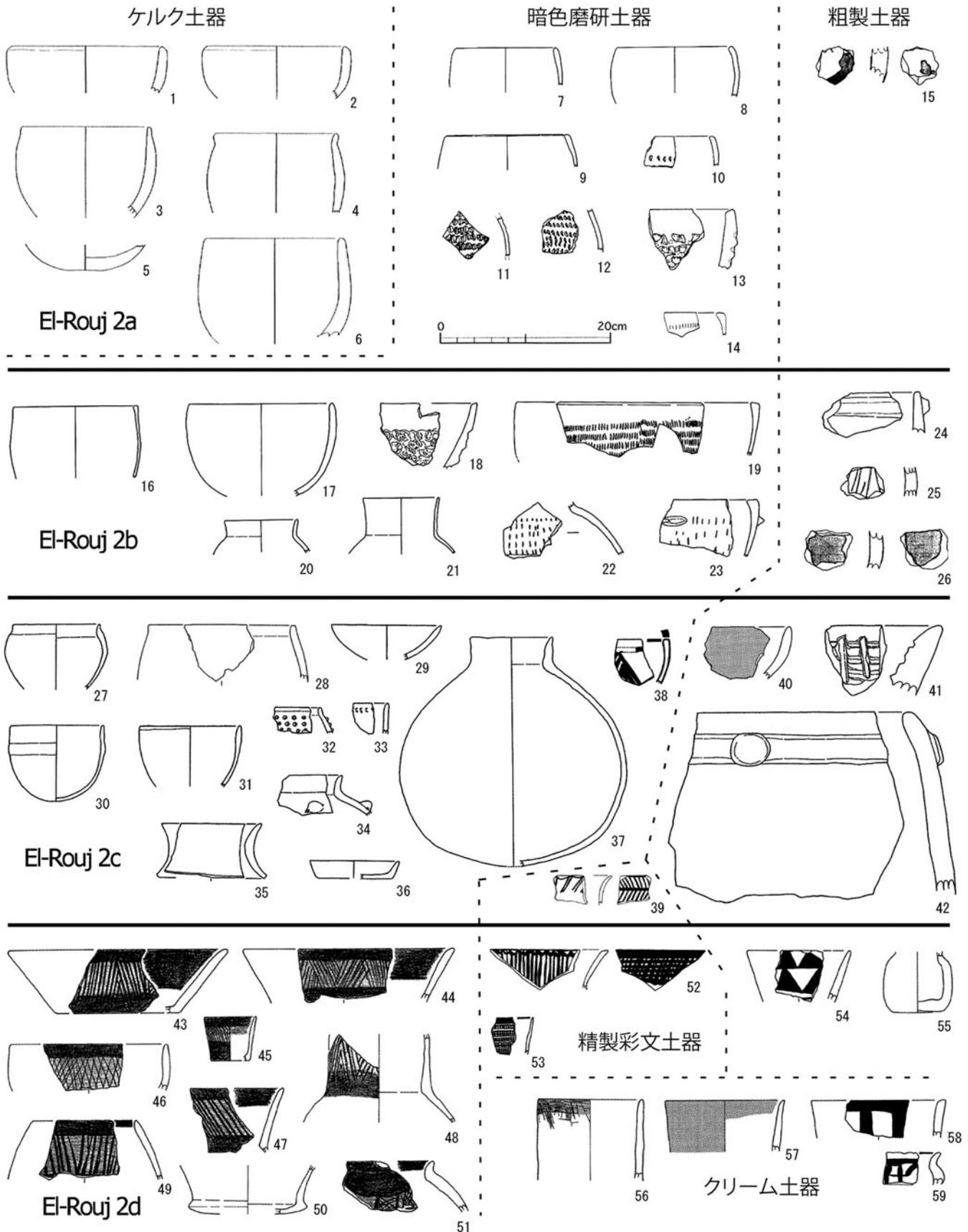


図2 エルルージュ2期の土器 (Tsuneki et al. 1998, 1999; Miyake 2003; Odaka 2003)

突文のほか、櫛歯文のような文様、あるいはユビで素地土を押しつぶし摘み上げたような装飾(図2: 18)など、押捺系の装飾がかなり頻繁に施され、多くは外面全体を覆うのが特徴である。また、後葉にはまれではあるが刻文の施される例もある。いっぽう、資料数の制約から不明なところもあるが、粗製土器にもやはり耳状把手や突帯が多くみられ、遅くとも2b期の後葉までに頸部をもつ壺形の器形が登場する。同じく後葉には爪形文や刻文(図2: 25)、貼付文などの装飾、あるいは赤色ウォッシュを施した粗製土器も現れる(図2: 26)。器面にプラスターを塗布した土器にはさらに赤色の彩文が施される場合が多く、粗製土器に塗布されたものに加え、暗色磨研土器と同様の胎土からなるものがテル・エル＝ケルク遺跡2号丘の4～3層に1点だけみられる。ただし、テル・アイン・エル＝ケルク遺跡の北西区2～1層や東トレンチ8層からはプラスターを塗布した土器が1点も出土していないため、もしこの例が攪乱による混入の結果であるならば、この種の土器は2b期の後葉以降に限定される可能性がある(cf. Miyake 2003: Note 9)。

#### エル＝ルージュ 2c 期

続くエル＝ルージュ 2c 期は、テル・アレイ遺跡2号丘8～1層(岩崎・西野編 1991: 43-52)、テル・アイン・エル＝ケルク遺跡中央区Ⅲ～Ⅱ期<sup>3)</sup>(Tsuneki et al. 1998: 14-18, 1999: 6-10, 2000: 7-11)、同じく東トレンチ6～4層で確認されている。この時期の放射性炭素年代は比較的多く測定されており、前6600～6100年頃という結果が得られている。土器アセンブリッジは、7～8割を占めて主体となる暗色磨研土器(図2: 27-37)と粗製土器(図2: 40-42)で基本的に構成されるが、異種の土器も若干加わる。

今のところ2c期の最初の段階といえる土器アセンブリッジは、テル・アレイ遺跡2号丘8～5層、テル・アイン・エル＝ケルク遺跡中央区Ⅲ期および東トレンチ6層で検出されている。暗色磨研土器に装飾が施される例は激減し、口縁直下に限って施される刺突文(図2: 33)がやや目立つ程度である。総じて押捺系の装飾はヴァリエーションが乏しくなるが、まれながら粘土紐や円盤状の粘土などを使った貼付文が登場する(図2: 32)。また、粗製土器の装飾には2b期と同じく、刺突文、刻文、貼付文(図2: 42)がみられる。粗製土器の器形では、底部に高台あるいは脚部をもつ台付きのものがこの段階で明確に現われる。暗色磨研土器、粗製土器ともに耳状把手は急減するいっぽうで、突帯は堅調に残存するが、暗色磨研土器の突帯は高さがなくなり薄くなっていく。器面にプラスターを塗布した土器は、胎土が暗色磨研土器同様なもの(図2: 38)と粗製土器に類するものの2種あり、場合によって赤色の彩

文が施されることは2b期と変わらない。なお、アムーク平原でいうウォッシュ押捺文土器(Washed Impressed Ware)がごくまれにみられはじめる。

次の段階はテル・アレイ遺跡2号丘4～3層、テル・アイン・エル＝ケルク遺跡中央区Ⅱ期および東トレンチ5層で検出されている。暗色磨研土器の装飾は少ないながらも刺突文を主とし、ごくまれに刻文や貼付文がみられるという構成で前段階から変化しない。しかし、この段階でわずかではあるが暗文の施された例がみられはじめる。また、器形が多様になり、大きく開いた浅い鉢や、胴部に屈曲部をもつ器形、台付きの器形などがみられる。粗製土器の装飾にはこれまでの種類に加えて彩文が現われる。プラスターを塗布した土器は粗製土器に限られるようになり、暗色磨研土器に類する胎土をもつものはほとんどみられない。また、テル・アイン・エル＝ケルク遺跡ではこの段階において、テル・サビ・アビヤド(Tell Sabi Abyad)遺跡をはじめジャジーラ地方の諸遺跡で知られるオレンジ精製土器(Orange Fine Ware)と呼ばれる土器(Le Mièrre and Nieuwenhuyse 1996)に類する土器、あるいは暗色非磨研土器として同定可能な土器が、ごくわずかながら出土しはじめる。なお、テル・アイン・エル＝ケルク遺跡中央区Ⅱ期のみ、東方のサマツラ土器(Samarra pottery)に類する精製彩文土器(図2: 39)(cf. Odaka 2003)やいわゆる脱穀盆(husking tray)が確認できるが(図2: 41)、これは後述するように、中央区Ⅱ期が2c期中葉のみならず後葉までカバーしているためかもしれない。

エル＝ルージュ 2c 期の最後の段階は、テル・アレイ遺跡1号丘25～22層および2号丘2～1層が想定されていたが、前者は出土土器が少ないため明確ではなく、後者も調査規模が小さいため資料に乏しい。しかも、テル・アイン・エル＝ケルク遺跡東トレンチ4層は、放射性炭素年代から同じ時期に位置付けられそうだが、テル・アレイ遺跡のものと様相を異にし、どちらかといえばテル・アイン・エル＝ケルク遺跡中央区Ⅱ期に近いような内容である。したがって、テル・アレイ遺跡1号丘25～22層および2号丘2～1層の土器アセンブリッジの特徴は時期差を示しているのか、あるいは地域差を示しているのかという疑問が残る。精製彩文土器も出土しているテル・アイン・エル＝ケルク遺跡中央区Ⅱ期が、テル・アレイ遺跡1号丘4～3層をもあわせて併行関係にある可能性も十分に考えられる。

参考までにテル・アレイ遺跡1号丘25～22層および2号丘2～1層の土器アセンブリッジの特徴をあげると、暗色磨研土器の装飾には連続して施文する貝殻腹縁文(rocker impressions)が顕著で、他には刺突文、貼付文、刻文、2例の暗文、そして新たに1例の彩文がみられる。

粗製土器の装飾には刻文だけしか知られていないが、前後の時期の装飾を考慮すれば資料不足のためとも思われる。プラスターを塗布した粗製土器や、東方との関係を示すようなサマツラ土器やハラフ土器に類する精製彩文土器も今のところみつかっていないが、これらもまた同様であろう。いっぽう、テル・アイン・エル＝ケルク遺跡東トレンチ4層の暗色磨研土器には貝殻腹縁文が1例しかなく、装飾は爪形文や刺突文が主で、他に1例の貼付文と2例の暗文がみられる。暗色磨研土器以外には、爪形文や刻文がまれにみられる粗製土器、プラスターを塗布した粗製土器、オレンジ精製土器、暗色非磨研土器が伴う。脱穀盆はテル・アレイ遺跡とテル・アイン・エル＝ケルク遺跡東トレンチの双方に確認できる。

#### エル＝ルージュ 2d 期

エル＝ルージュ 2d 期は2期の最後の時期にあたり、テル・アレイ遺跡1号丘 21～18層、テル・アブド・エル＝アジズ遺跡下層、テル・アイン・エル＝ケルク遺跡中央区 I 期および東トレンチ 3～1層から資料が得られている。また、放射性炭素年代測定の結果より、前 6100～5800 年頃という年代が与えられている。この時期になると、土器アセンブリッジは大きく様変わりする。暗色磨研土器 (図 2: 43-51) が引き続き 7 割程度を占め、粗製土器 (図 2: 54, 55) が伴うという形は変わらないが、クリーム土器 (Cream Ware; 図 2: 56-59) が明確に出現し<sup>4)</sup>、暗色非磨研土器の割合が増す。また、精製彩文土器も若干増加するが、ハラフ成立期から前期の土器に類するものに変化するので (図 2: 52, 53)、その時期によってエル＝ルージュ 2d 期を前葉 (ハラフ成立期併行) と後葉 (ハラフ前期併行) に二分できる可能性がある。たとえば、テル・アブド・エル＝アジズ遺跡では 2d 期の層が地山直上に、つまり 2c 期から連続せずに存在し、ハラフ成立期に類する土器がみられないことから、後葉のみの堆積である可能性が高い。

暗色磨研土器の胎土は混和材の少ない精良で明色のものが多くなり、器面にはしばしば暗色のウォッシュが施され、外面のミガキ調整は口縁部から胴部上半までというように、全体に施されない場合が多々みられるようになる。装飾は暗文 (図 2: 43-49, 51) が圧倒的な割合を占めるようになり、他に刻文、刺突文、彩文がわずかに存在する。貼付文はすっかり影を潜め、装飾の立体的な構成は平面的な構成に取って代わられる。器種器形はハラフ土器の影響を色濃く反映し、いわゆるクリーム・ボウル (cream bowl; 図 2: 50) や器壁がほぼ真っ直ぐに外向して立ち上がる平底の鉢 (図 2: 43) など、ハラフ土器に特有といわれる器種が登場する。その他、透かし孔のある台付き鉢など、2c 期と比べてさらにヴァリエーションが増す。ただし、把手や突帯

は極端に少なくなる。

粗製土器の装飾は彩文 (図 2: 54) と刻文が多く、プラスターを塗布したうえで彩文を施したのも存在するが、刺突文や貼付文はほとんどみられない。クリーム土器は、その名のとおりにクリーム色など明色系の色調を呈し、混和材をあまり含まない精良な胎土を持ち、器面はナデあるいは軽いミガキで調整される土器である。同時期における胎土や器種・器形上の類似から、暗色磨研土器から派生したものと考えられる。赤色あるいは赤褐色のウォッシュが施されることがあり (図 2: 56, 57)、時には彩文 (図 2: 58, 59) や暗文で装飾される。暗色非磨研土器は無文で、鉾物粒を大量に含み、口縁部が肥厚し面取りされる無頸壺が多い。

以上、ルージュ盆地における土器の変遷を追いかけてきた。盆地内における新石器時代の各遺跡・各発掘区の帰属時期をこの編年観に沿って整理すると、表 2 の通りになる。土器の種類は 2c 期以降に増加するが、基本的に暗色磨研土器が主体を占め、粗製土器が客体的に共存するという点は一貫している (図 3)。ケルク土器、暗色非磨研土器、クリーム土器がすべて暗色磨研土器の系統に属することを加味すると、その卓越性は抜きんでており、2c 期以降に出現する外来のオレンジ精製土器や精製彩文土器だけが異質であるが、それらの出土量はごくわずかである。器形は初め鉢形に限られるが、2b 期の暗色磨研土器に頸部をもつ壺が出現し、以後徐々にヴァリエーションを増す。把手や突帯は 2b 期に盛行し 2c 期にまで継続するが、2d 期にはほとんど姿を消してしまう。装飾の点では、2a 期前葉における無文のみの状態から、2a 期後葉に押捺や貼付といった立体的な装飾が加わって 2b 期に隆盛し、その後 2c 期の無文化を経て、2d 期に彩文や暗文といった平面的な装飾に変化していくという、大まかな流れが看取できる。

#### 4. 暗色磨研土器が出土した他遺跡との比較・考察

これまで述べてきたルージュ盆地における土器の変遷は、従前のアムーク編年に置き換わる、シリア＝キリキアグループの新しい編年基準として期待される。すでに三宅やバロッシ (F. Balossi)、ニウウェンハイセ (O. Nieuwenhuyse) らによって、いくつかの遺跡についてルージュ編年との対応関係が検討され (三宅 1997; Balossi 2004; Nieuwenhuyse 2009b)、また、アムーク平原の諸遺跡とラス・シャムラ遺跡、ユムクテベ遺跡などの間については、相対編年を示唆した先行研究が存在する (Contenson 1982; Breniquet 1995)。しかし、これらには多くの意見の食い違いがみられ、共通の理解が得られているとはいえない。

表2 ルージュ盆地の新石器時代編年

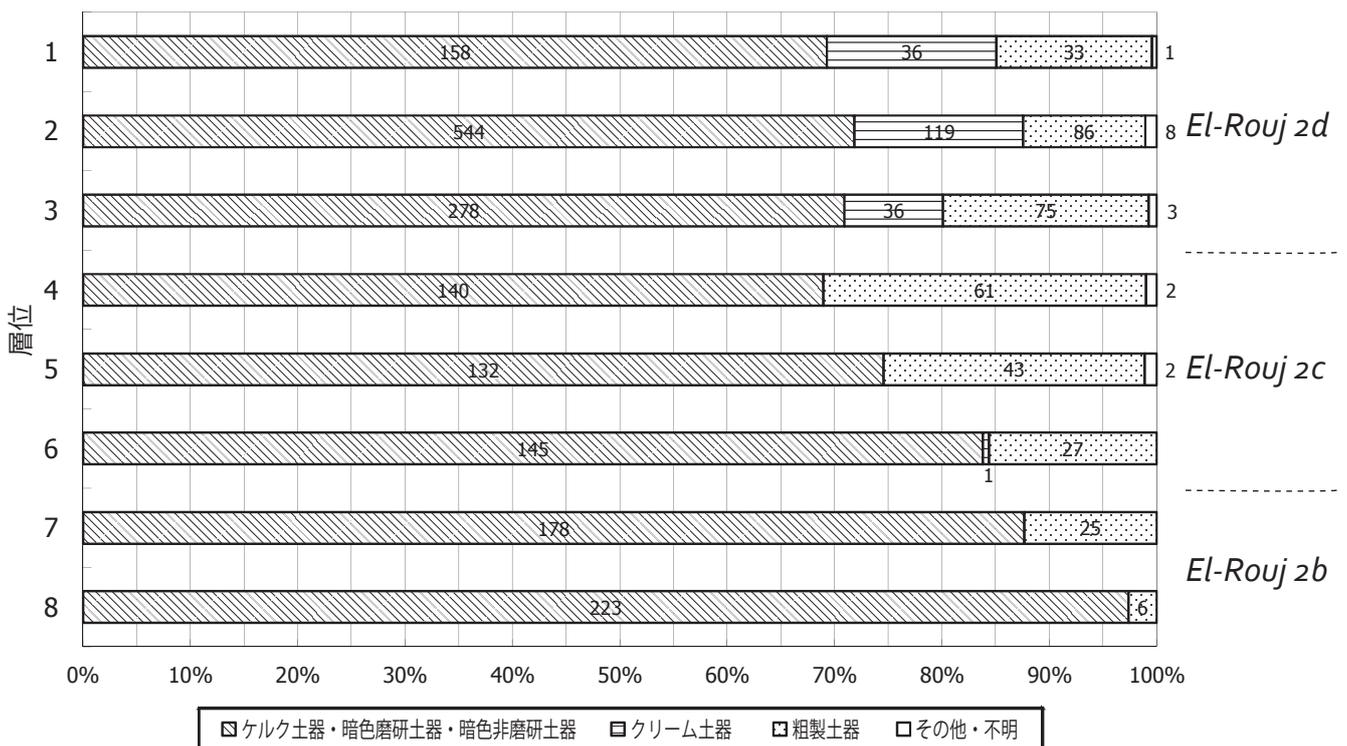
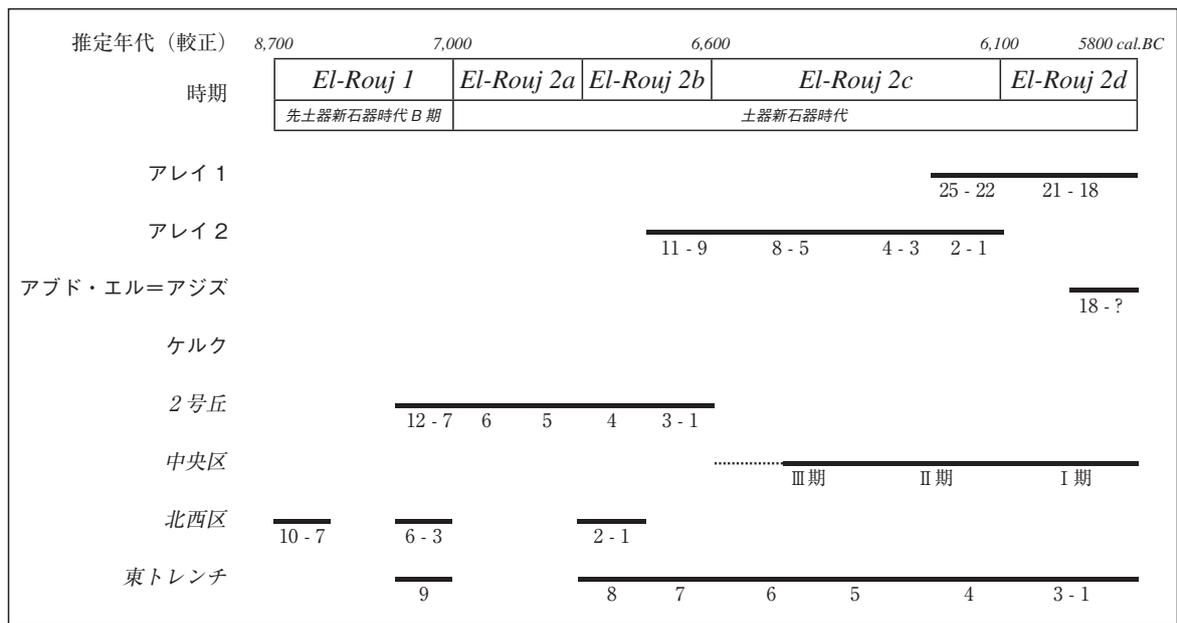


図3 テル・アイン・エル＝ケルク遺跡東トレンチにおける土器アセンブリッジの変遷 (口縁部片出土数。数字は標本数)

では、実際のところ、ルージュ編年で捉えられる土器アセンブリッジの変化は、空間的にどこまで敷衍可能なのだろうか。以下では、北レヴァントやキリキア地域における他の土器新石器時代遺跡の例をルージュ盆地との比較のうえで検討し、この疑問の解決を試みたい (図4)。

ルージュ盆地に近似する例

—アムーク平原およびラタキアとイドリブの近郊

アムーク平原では、テル・アル＝ジュダイダ (Tell al-Judaidah) 遺跡とテル・ダハブ (Tell Dhahab) 遺跡から土器新石器時代の資料が得られている。バロッシは、テル・アル＝ジュダイダ遺跡にみられる方解石混和赤色胎土

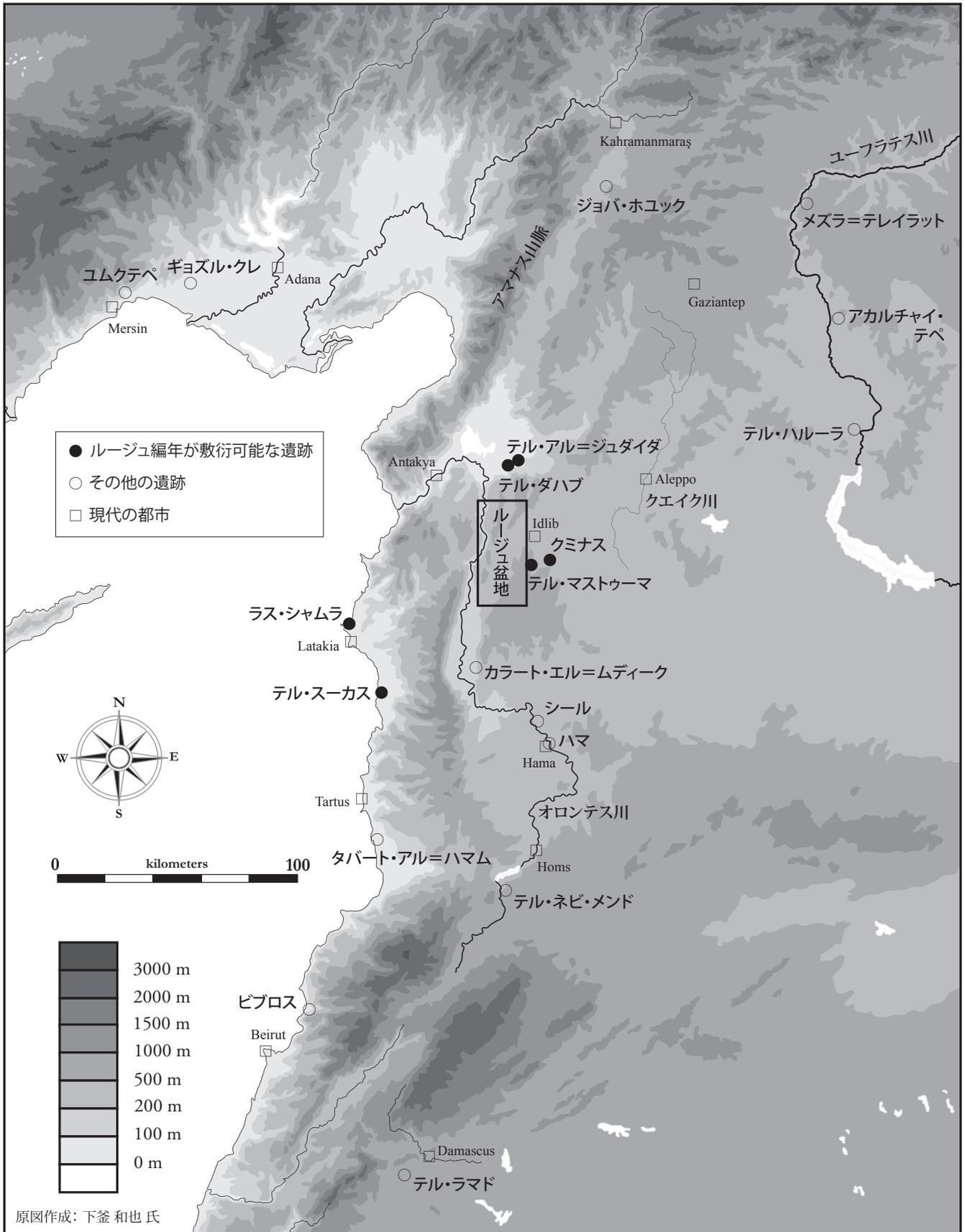


図4 言及される遺跡の位置

(calcite in red clay) の暗色磨研土器がケルク土器と比較可能であるとして、これが多く出土した JK3 区 28～26 層がエル＝ルージュ 2a 期に併行すると考えている (Balossi 2004)。しかし、三宅はテル・アル＝ジュダイダ遺跡の方解石混和赤色胎土の暗色磨研土器をケルク土器と対比しておらず、エル＝ルージュ 2a 期のほうが先行すると考えている (三宅 1997)。筆者は方解石混和赤色胎土の暗色磨研土器を実見しておらず、また、ケルク土器と違ってこの種の土器に把手が頻出する点 (Braidwood and Braidwood eds. 1960: 49) も気になるが、とりあえずパロッシの見解に従っておくならば、これがわずかに残るテル・アル＝ジュダイダ遺跡 JK3 区 25 層が、同じくケルク土器が少量残存するエル＝ルージュ 2b 期の前葉に併行するといえる。しかし、ブレイドウッドらによる報告を参照すると、そう単純にはいかないようだ。JK3 区 28～25 層はアムーク編年の A 期として一括して報告されており、土器アセンブリッジは暗色磨研土器を主体とし、その亜種であるウォッシュ押捺文土器と粗製土器からなる。ルージュ盆地とはウォッシュ押捺文土器の多寡が異なるが、それ以外の構成に変わりはない。だが、その器形には明瞭な頸部をもつ壺が複数みられる (Braidwood and Braidwood eds. 1960: Fig. 24)。これらはルージュ盆地において 2b 期以降に出現するものであり、すべてが 25 層から出土したならばこの層をエル＝ルージュ 2b 期併行とすればよいのだが、特にそのような記載はない。したがって、今のところはテル・アル＝ジュダイダ遺跡のアムーク A 期という大きな括りで考え、これをエル＝ルージュ 2a～2b 期併行とするのが無難であろう。

アムーク編年で A 期とされる資料には、他にテル・ダハブ遺跡のものがある (Braidwood and Braidwood eds. 1960)。しかし、三宅は胴部に屈曲部をもつ浅鉢形の暗色磨研土器や口縁直下に限定して施文される刺突文の存在などから、テル・アル＝ジュダイダ遺跡のアムーク A 期より新しい様相を示していると考え、エル＝ルージュ 2c 期の一部に相当するとしている (三宅 1997)。また、パロッシも貝殻腹縁文と暗色非磨研土器の存在を指摘し、テル・アル＝ジュダイダ遺跡のアムーク A 期と切り離し、エル＝ルージュ 2c 期併行とすべきだという意見を述べている (Balossi 2004: 122)。

アムーク A 期に続くアムーク B 期は、テル・アル＝ジュダイダ遺跡 JK3 区 25～24 層を示準とする。暗色磨研土器の様相は、器形や装飾の点からみてエル＝ルージュ 2c 期全般のそれにきわめて似ており、暗色非磨研土器も同様に登場する。また、エル＝ルージュ 2b 期後葉以降と同じく、粗製土器には赤色ウォッシュ、あるいは刻文や刺突文による装飾がみられはじめる。したがって、アムーク B 期が

エル＝ルージュ 2c 期に併行することはほぼ間違いない。パロッシは、粗製土器に装飾が施される例の存在などいくつかの共通点をあげてエル＝ルージュ 2d 期併行としているが (Balossi 2004: 128)、これらの共通点は基本的に 2c 期からみられるものである。

ところで、テル・アル＝ジュダイダ遺跡では、アムーク A 期から B 期への移行において間隙のないシーケンスが得られているようにみえる。また、テル・ダハブ遺跡のアムーク A 期は層位学的な裏づけを欠いており、一時期を占めるアセンブリッジを構成するか否かは不明であるものの、土器の種類をみるかぎりにはテル・アル＝ジュダイダ遺跡のアムーク A 期とほとんど共通する。しかし、主体を占める暗色磨研土器の様相は同遺跡のアムーク B 期に近く、両者の折衷的な様相であるともいえる。ルージュ編年でいうところの 2c 期前葉あたりに相当すると思われるが、同じアムーク平原内のテル・アル＝ジュダイダ遺跡のシーケンスと部分的に併行関係にあるのか、それとも補う関係にあるのかは今のところ判断できない。

アムーク編年では、B 期と続く C 期の間に第一攪乱域 (First Mixed Range) なるものが設定されており、F 期の建物によって破壊されたテル・アル＝ジュダイダ遺跡 JK3 区 23～22 層の資料が紹介されている。その土器を一瞥すると確かに後世の資料も多く含まれているが、アムーク B 期にも C 期以降にもみられない一群の土器が存在し、それらはエル＝ルージュ 2d 期の土器と一致する (三宅 1997)。したがって、第一攪乱域にもともと存在していたはずの土器のうち、少なくとも一部分はエル＝ルージュ 2d 期に併行すると考えてよいだろう。

ラタキア市の北に位置するラス・シャムラ遺跡では、2 地点の先史調査によって得られた土器新石器時代の層位から、VB、VAI、VAII の各期が設定された (Contenson ed. 1992)。VB 期の土器は暗色非磨研土器がわずかながらみられるものの、圧倒的な割合を占める暗色磨研土器は器面全体を覆う爪形文などエル＝ルージュ 2b 期のものに類似する。ケルク土器に類する土器が出土していないので、2b 期のなかでも後葉に相当するのかもしれない。暗色磨研土器の様相は VAI 期になっても VB 期とあまり変わらない。ただし、ルージュ盆地ではエル＝ルージュ 2c 期中葉以降にしかみられない暗色非磨研土器の割合が増加し、わずかながら暗文をもつ暗色磨研土器や脱穀釜も出土している。VAII 期の暗色磨研土器は帯状の刺突文や暗文、胴部に屈曲部をもつ浅鉢形など、エル＝ルージュ 2c 期中～後葉のそれによく一致している。脱穀釜も一般化しており、両者が併行関係にあるとみて問題ないだろう。したがって、その前の VAI 期は、VB 期と併行関係と思われるエル＝ルージュ 2b 期と 2c 期中葉の間に相当すると考えておき

表3 ラス・シャムラ遺跡およびユムクテベ遺跡の放射性炭素年代 (Balossi 2004: Tab. 7をもとに作成)

遺跡	時期/層位	year bp	Lab. no.
ラス・シャムラ	VA期	7184 ± 84	P-457
ラス・シャムラ	VB期	7686 ± 112	P-458
ユムクテベ	XXIII～XXII層	7010 ± 75	Rome-1345
ユムクテベ	XXIV層	6675 ± 70	Rome-1010
ユムクテベ	XXV層	6980 ± 80	Rome-809
ユムクテベ	XXV層	7030 ± 90	Rome-806
ユムクテベ	XXVII～XXVI層	7090 ± 70	Rome-956
ユムクテベ	XXVII～XXVI層	7100 ± 70	Rome-957
ユムクテベ	XXVII～XXVI層	7160 ± 80	Rome-807
ユムクテベ	XXVII～XXVI層	7380 ± 80	Rome-808
ユムクテベ	XXVIII層	7280 ± 70	Rome-1226
ユムクテベ	XXVIII層	7545 ± 75	Rome-1011
ユムクテベ	XXIX層	7640 ± 80	Rome-1343
ユムクテベ	XXIX層	7750 ± 80	Rome-1344
ユムクテベ	XXXII層	7790 ± 80	Rome-734
ユムクテベ	XXIII層	7920 ± 90	Rome-467

たい。この関係は、ラス・シャムラ遺跡で得られた放射性炭素年代を参照しても妥当であろう(表3)。VAII期に続くIVC期の土器は明らかにハラフ中～後期の影響が色濃く、ルージュ盆地の2期ではなくその次の3期に併行すると思われる。したがって、エル＝ルージュ2d期に当たる土器アセンブリッジがラス・シャムラ遺跡ではみられない。これがシークエンスの空白にあたるのか、それとも地域差によるものなのかは不明である。

イドリブの南方5kmにあるテル・マストゥーマ(Tell Mastuma)遺跡では、テル南端の15Gc区で地山直上のi層より土器新石器時代の資料がわずかながら得られた(Tsuneki 1995)。土器アセンブリッジは暗色磨研土器、粗製土器、クリーム土器、精製彩文土器からなっており、ルージュ編年の提唱者でもある報告者の常木晃はエル＝ルージュ2d～3期に位置づけた(Tsuneki 1995: 102-103)。しかし、この判断には当時クリーム土器の初現を3期と考えていた点が影響しており(cf. Iwasaki et al. 1995: 148-149)、現在の見地からみればすべて2d期の範疇、なかでもおそらく後葉に帰属するものと考えられる。

イドリブの南東6kmに位置するクミナス(Qminas)遺跡は、1981年に発掘された。その結果、上層から器面全体に爪形文を施した暗色磨研土器などエル＝ルージュ2b期後葉にあたる土器、そして無文かつ薄手で、器形からエル＝ルージュ2c期に比定できる暗色磨研土器が出土した(Masuda and Sha'ath 1983)。ほぼルージュ盆地の土器アセンブリッジと共通しているが、アムーク平原のA～B期と同様にウォッシュ押捺文土器が多数出土している点に違いがある。いずれにせよ、エル＝ルージュ2b期後葉か

ら2c期に併行するものと考えられる。

1959年と60年に発掘されたテル・スーカス(Tell Sukas)遺跡は地中海の東岸、ラタキア市の南に位置し、N期が土器新石器時代に相当する。N期はN<sup>II</sup>からN<sup>I</sup>まで細分されているが、報告者はN<sup>II</sup>からN<sup>0</sup>までを前期、N<sup>0</sup>からN<sup>I</sup>を中期、N<sup>3</sup>からN<sup>I</sup>を後期とし、前期はラス・シャムラ遺跡のVA期からVB期、中期はアムークB期、後期はアムークC期およびラス・シャムラ遺跡のIV期に併行すると推定している(Riis and Thrane 1974)。前期と中期の出土土器は無文の暗色磨研土器が圧倒的に多く、N<sup>II</sup>期から暗文と刺突文が1例ずつみられるのみである。なお、わずかながら前期から暗色非磨研土器が出土しているとされるが、紡錘車に転用された破片などが多く、先に述べた同定上の問題を考慮すれば、存在が明確とはいえないだろう。暗色非磨研土器は後期に刻文または押捺文を伴って急激に増加するが、報告書の写真を参照するかぎり、暗色非磨研土器に分類されている標本には口縁部などが部分的にミガキ調整されているものが混在しているようだ(e.g. Riis and Thrane 1974: Pl. III. G)。また、ハラフ土器の影響はまったくみられない。よって、ラス・シャムラ遺跡のIV期はおろか、ハラフ土器の影響が顕著なエル＝ルージュ2d期にまでも下る可能性は低い。ここでは、N期全般を通じておおよそエル＝ルージュ2c期中～後葉に併行すると評価しておきたい。

以上に述べてきた諸遺跡は、アマナス山脈の南、オロンテス川の下流域とシリア北西部ラタキア県の海岸平野、および東側のイドリブ県の範囲内に収まるが、これらの遺跡で共通するのは土器アセンブリッジ全体に占める暗色磨研土器の圧倒的な卓越性である。また、ウォッシュ押捺文土器や貝殻腹縁文の多寡など、遺跡によっていくらかの違いもみられるが、大局的にルージュ編年と矛盾する土器アセンブリッジの変遷は確認できず、ルージュ編年を基準として適用できそうな地理的範囲といえる(表4)。

いっぽう、トルコ南東部のジョバ・ホユック(Coba Höyük)遺跡は、アマナス山脈の東、死海地溝帯最北端のアムーク平原とキリキアを結ぶ要衝に立地する。暗色磨研土器を主体とする土器アセンブリッジが検出されているが、報告書の記載をみる限り地山直上の出土土器でもかなり装飾がみられ、直線的に外向した器壁をもつ平底の鉢など器形にハラフ前期土器の影響が色濃く現れているように思われる(Garstang et al. 1937; Plat Taylar et al. 1950)。したがって、エル＝ルージュ2d期以降に併行すると考えてよいだろうが、装飾には暗文以外に刻文が目立ち、エル＝ルージュ2d期の暗色磨研土器とは趣がかなり異なる。また、たとえばプラット＝タイラー(J. du Plat Taylar)らによる報告では、最古の時期にあたるI期の暗色磨研土

表4 ルージュ編年が敷衍可能な土器新石器時代遺跡の相対編年試案

ルージュ	ジュダイダ	ダハブ	ラス・シャムラ	マストウーマ	クミナス	スーカス
2d 期	(第一攪乱域)		?	15Gc 区 i 層		
2c 期	アムーク B 期	?	VAII 期		上層	N 期
	?	アムーク A 期	VAI 期			
2b 期	アムーク A 期	?	VB 期			
2a 期						

器がエル＝ルージュ 2d 期、次の II 期のそれがエル＝ルージュ 2c 期に類似する (Plat Taylor et al. 1950: Figs. 12, 15) など、ルージュ編年に準拠すると不可解な状況がみてとれる。調査・報告年次が古いこともあり容易には解釈し兼ねるが、シリア＝キリキアグループの「キリキア」に接する「シリア」最周縁の位置にあって、ルージュ盆地などとは異なった地域性をみせているという可能性は指摘できよう。

シリア＝キリキアグループ内の「キリキア」

前節で述べたルージュ盆地とその周辺をシリア＝キリキアグループの「シリア」とするならば、アマナス山脈を越えた西方が「キリキア」である。この地域における当該期の既知の遺跡は決して多くないが、代表例であるユムクテペ遺跡とルージュ編年との対応関係はバロッシによって検討されている (Balossi 2004)。

彼女はユムクテペ遺跡の砂粒混和土器 (Sandy Ware) をケルク土器に類するものとして、これが主体的に出土した XXXIII～XXX 層をエル＝ルージュ 2a 期、暗色磨研土器が卓越し砂粒混和土器がわずかに残存する XXIX～XXVIII 層を 2b 期併行と考えている。後者は、エル＝ルージュ 2b 期のうちでもケルク土器が少量残る前葉に併行するとしてもよいかもしれない。ただし、ユムクテペ遺跡で得られた放射性炭素年代測定値を参照すると、むしろ XXXIII～XXX 層がエル＝ルージュ 2b 期に相当し、XXIX～XXVIII 層は 2c 期の前～中葉に併行する年代である<sup>9)</sup> (表 3)。そもそも、この時期の出土土器にかんする報告は詳らかでなく、XXIX～XXVIII 層出土土器は口縁直下に施される爪形文などからエル＝ルージュ 2c 期との類似を想起できるものの、判然としない。

XXVII～XXVI 層になると、暗色磨研土器は土器アセ

ンブリッジの約 16% を占めるに過ぎなくなる (Balossi-Restelli 2006: 18-22)。主体を占めるのは酸化雰囲気焼成された明色系のミガキ調整されない土器であり、ルージュ盆地およびその周辺にみられる暗色磨研土器が卓越した土器アセンブリッジとは明らかに異なる。ただし、暗色非磨研土器が出現することから、この時期をエル＝ルージュ 2c 期中～後葉併行と考えても、放射性炭素年代の測定値に齟齬はない。それはハラフ中期土器が出土する層よりも古く、ハラフ前期土器の影響を受けた土器が出土している XXV～XX 層をエル＝ルージュ 2d 期併行とした場合も同じである。しかしながら、ルージュ盆地およびその周辺にみられる土器アセンブリッジとの類似性に乏しいことは、厳然たる事実といえる。

ギョズル・クレ遺跡は、ユムクテペ遺跡と並んでブレイドウッドがシリア＝キリキアグループの遺跡としてあげたキリキア地域の遺跡である (Goldman ed. 1956)。新石器時代の所産とされる層から出土した暗色磨研土器には、器面の全体あるいは一部を覆う爪形文や刺突文、貝殻腹縁文などがみられ、ルージュ編年という 2b 期から 2c 期の様相に類似する。しかし、主体となるのは暗色磨研土器ではなく、明色系の器面を持つ砂粒が混和された、必ずしもミガキ調整されているわけではない土器 (Light Gritty Ware) で、土器アセンブリッジのおよそ三分の二を占める。出土土器を報告したメリンク (M. J. Mellink) は、アムーク平原との共通性を強調し、A 期あるいは B 期にかけての時期から併行すると考えているが (Mellink 1956: 70-71)、当時の比較資料の乏しさに鑑みれば致し方ないとはいえ、むしろユムクテペ遺跡の XXVII 層以降と同様、アムーク平原やルージュ盆地の暗色磨研土器を主体とするアセンブリッジの構成とは大きく異なる点に留意しておきたい。

以上のように、キリキア地域の当該期の遺跡は発掘事例

が少ないものの、いずれも暗色磨研土器を主体とする土器アセンブリッジを維持し続けはしないという、ルージュ盆地周辺との決定的な違いがある。

#### 南側の境界—ハマとタルトゥースの近郊

オロンテス川の中流域、現在の都市ハマの市街に位置するハマ (Hama) 遺跡では、1933年にG11x区35～16層で土器新石器時代の資料が得られた (Thuesen 1988)。M期と名付けられたこの時期の土器は、27層まで暗色磨研土器などの精製土器 (Burnished Ware) に限られていたようだが、26層以降は粗製土器 (Plain Ware) を伴っていた。27層までの暗色磨研土器には、エル＝ルージュ 2a期から2b期にみられるような器面全体を覆う爪形文が散見されるが、ケルク土器に類するような土器は出土していない。また、M期最下層の35層からすでに明瞭な頸部をもつ壺が出土しているため、エル＝ルージュ 2b期後葉以降に併行する可能性が考えられる。そして、無文の土器が大部分を占め、ハラフ土器の影響がまったくうかがえないことから、上限はエル＝ルージュ 2c期併行までといえるかもしれない。ただし、M期に続くN期にはすでにハラフ中期以降の影響が色濃くみえる。この遺跡ではハラフ成立期から前期、すなわちエル＝ルージュ 2d期併行期の資料を欠いているのか、それともM期のアセンブリッジがこの時期まで継続するのかは不明である。いずれにせよ、1988年の報告時に活用できた実資料は数量的に限られていたようである (Thuesen 1988: 19-21)。また、1970年代の初頭には、同じくオロンテス川の中流域、後世のアパミア近郊に位置するカラート・エル＝ムディーク (Qal'at el-Mudiq) 遺跡で、エル＝ルージュ 2c期中葉以降に相当するとも推される暗文や突帯をもつ暗色磨研土器が出土した (Collon et al. 1975)。しかし、後世の土器と混在していたうに図面などの詳細な報告がないため、詳しい検討はできない。

以上のように、オロンテス川中流域、ハマ近郊の土器新石器時代についてはきわめて資料が限られ、その土器アセンブリッジも不明瞭であったが、近年になって開始されたシール遺跡の発掘調査は、その状況を打開しつつある (Bartl et al. 2006, 2008)。土器については、分析を担当するニュウエンハイスが比較的詳細に報じている (Nieuwenhuyse 2009a, 2009b)。

この遺跡において地山直上を含む下層にあたるKL7区 (1～3層) は、放射性炭素年代測定により前7000～6650年頃と推定されている (Bartl et al. 2008)。ここから出土した土器は、73%を暗色磨研土器が占め、15%の明色磨研土器 (Light-Faced Burnished Ware) と12%の粗製土器 (Coarse Unburnished Ware) が伴うという。また、明色

磨研土器はより下部の層に多く、粗製土器のほとんどはKL7区でも最上部の3層から出土している。明色磨研土器はルージュ盆地におけるケルク土器と同様の出土傾向にあるといえるが、器面は白色に近い淡黄色や明灰色で把手をもつ例もあり、ケルク土器とは異なる。ニュウエンハイスは、ラス・シャムラ遺跡VAI期やテル・スーカス遺跡N<sup>3</sup>～N<sup>1</sup>期に外見上は類似する例があるとしているが、これらは先述した相対編年に照らし合わせると、ケルク土器よりやや新しい時期に位置づけられる。

短い間隙を挟み、前6600～6400年頃と推定されるL7区 (4～6層) から出土した土器は、一転して粗製土器が9割程度を占める。暗色磨研土器は1割程度に限られ、明色磨研土器は12624点の標本中1点を数えるに過ぎない。暗色磨研土器には縄文 (cord-impressed) や櫛描文 (comb-incised) が盛行するが、これらは後述するタバート・アル＝ハムム (Tabbat al-Hammam) 遺跡、あるいは南方の中部レヴァントでよくみられる装飾であり、ルージュ盆地とその周辺では出土例が皆無に等しい。

前6400年以降の年代と推定されるK12区およびNO20区では、粗製土器が標本中の98%を占めるまでになる。資料数があまり多くないため詳しいことは分からないものの、いわゆる脱穀盆の出現が注目に値する。これだけを見れば、エル＝ルージュ 2c期後葉併行とも考えられる。

ニュウエンハイスは放射性炭素年代と土器の型式学的な比較から、KL7区をエル＝ルージュ 2a期併行、L7区を2b期併行、K12区およびNO20区を2c期併行と推定している。しかし、L7区以降の圧倒的な粗製土器の卓越化と暗色磨研土器にみられる装飾技法の違いは、シール遺跡についてはハマ近郊とルージュ盆地およびその周辺の間で、土器による相対編年の構築が困難であることを如実に物語っている。しかも、エル＝ルージュ 2c期の年代は前6600～6100年頃と推定されており、シール遺跡のL7区からK12区およびNO20区まで双方の推定年代にまたがる。したがって、彼の推定の根拠はきわめて薄弱と言わざるをえない。

タルトゥース市の南に位置するタバート・アル＝ハムム遺跡は、1938年に発掘調査され、TT1区I-1層より土器新石器時代の資料が出土した (Braidwood 1940)。後年この資料はホール (F. Hole) によって検討されたが (Hole 1959)、その報告によれば土器アセンブリッジの半数近くを暗色磨研土器が占め、把手の頻出や頸部が存在することなどからエル＝ルージュ 2b期後葉との類似がうかがえる。しかし、特徴的な縄文土器 (cord marked ware) といった、より北方の遺跡ではみられない土器も多数出土しており、併行関係を推定するのは困難である。むしろ、より南方の中部レヴァント、ホムス市の南約20kmに位置するテル・

ネビ・メンド (Tell Nebi Mend) 遺跡 (Mathias and Parr 1989) やダマスカス市近郊に所在するテル・ラマド (Tell Ramad) 遺跡 III 層 (Contenson 2000: 219-243) に近い様相を示しており、ルージュ盆地の事例とはあまりに違いが大きい。

述べてきたように、ハマ近郊やタルトゥース近郊の資料は、ルージュ盆地といった北方との比較だけでは共通性が低く、相対編年の検討は容易でない。ルージュ盆地やその周辺とは異なった独自の土器アセンブリッジの変遷過程が窺えるし、南方にある中部レヴァント地域との関係性にも焦点を当てながら検討する必要がある。そもそもブレイドウッドは当初、タバート・アル＝ハムム遺跡や南方のレバノン領内に所在するビブロス (Byblos) 遺跡、さらにはラス・シャムラ遺跡までも「レバノン＝シリア (Lebanon-Syria)」として別に括っていた (Braidwood and Braidwood 1953)。1954年の段階からラス・シャムラ遺跡はもとより、ハマ遺跡やタバート・アル＝ハムム遺跡、ビブロス (Byblos) 遺跡を「南のヴァリエーション (southern variant)」としてシリア＝キリキアグループの範疇に含めたものの (Braidwood 1954, 1955: 74-75)、1960年の段階で少なくとも後二者をふたたび除外している (Braidwood and Braidwood eds. 1960: 501-505)。その理由には、縄文など土器装飾の独自性のほか、石器インダストリーにおけるパレスティナとの類似などがあげられていた。より北方に位置するシール遺跡において、中部レヴァントと類似した土器が出土し、北方の地域とは異なる土器アセンブリッジの変遷が捉えられた今、タルトゥース近郊がシリア＝キリキアグループから外れるのはさらに明白になったといえよう。

#### 東側の境界—クエイク川とユーフラテス川の流域

シリア、イドリブ県の東側はアレッポ県であるが、その中心都市アレッポ付近を南北に流れるクエイク川の流域は1977年から79年に一般調査が行なわれた (Matthers ed. 1981)。採集土器はメラート (J. Mellaart) によってクエイク A 期から H 期までに編年されたが、そのうち A 期と B 期が新石器時代に該当する (Mellaart 1981)。報告中の「単色磨研土器 (monochrome burnished ware)」が暗色磨研土器に当たり、A 期が口縁直下の爪形文などからエル＝ルージュ 2c 期、B 期が暗文の発達などからエル＝ルージュ 2d 期にそれぞれ併行するとも推される。しかしながら、本格的な発掘調査がなされたわけではないため、土器アセンブリッジ全体の詳細はわからない。

イドリブ県より東で本格的に発掘された土器新石器時代の遺跡となると、ユーフラテス川中・上流域に目を向けざるを得ない。テル・ハルラ (Tell Halula) 遺跡やアカル

チャイ・テペ (Akarçay Tepe) 遺跡、メズラ＝テレイルト (Mezraa-Teleilat) 遺跡では、ケルク土器に類似したいわゆるブラック・シリーズ (Black Series) と称される土器が当地域最古の土器として知られるが、ルージュ盆地と違って暗色磨研土器は後続しない (Faura and Le Mière 1999; Arimura et al. 2000; Karul et al. 2001, 2002, 2004)。ブラック・シリーズに代わってユーフラテス川流域以東の土器アセンブリッジの主体を占めていくのは、明色系の器面をもつ胎土にスサが混和された土器であり、少なくともクエイク川より西の地域とは明らかな地域差をみせる。なお、ユーフラテス川流域から東側のジャジーラ地方でも、土器新石器時代を通じて暗色磨研土器の出土が報じられる場合がある。しかし、それらの出土量はきわめて少ないため、西方から搬入されたものと解釈されるのが一般的であり、いくつかの胎土分析の結果もその解釈を支持している (e.g. Le Mière 1989)。

#### 5. まとめ

これまでみてきたように、ルージュ盆地で構築された編年を敷衍可能な地理的範囲は、アマナス山脈の南、オロンテス川の下流域とシリア北西部ラタキア県の海岸平野、およびその東側のイドリブ県に限られる。同じ土器編年を適用できる空間は、同一の土器伝統を共有する人びとの分布域といえるだろう。もし、土器を示準遺物として定義できる考古学的文化が存在するのならば、すなわち上にあげた範囲が同一の考古学的文化の分布圏ということになる。また、この暗色磨研土器を主体とする土器伝統をシリア＝キリキアグループの示準とするのならば、それもまた同様である。

これは従来、シリア＝キリキアグループとして考えられていた地理的範囲よりも遥かに小さい。しかも、さらに細部に着目するならば、この狭い地域内ですらウォッシュ押捺文土器や貝殻腹縁文をもつ暗色磨研土器の多寡といった地域性が認められる。そもそも、シリア＝キリキアグループとして括られてきた地理的範囲は、アンサリエ、アマナス、タウルスなど多くの急峻な山脈が走り、狭小な海岸平野や盆地、あるいは河谷が連なる、地勢的にきわめて入り組んだ複雑な地域である。ジャジーラの平原地帯や南メソポタミアの低地帯とは明らかに違い、人びとが定住農耕生活を営む集落と日常的な活動領域は、周囲をとりまく自然の障壁によって細かく分断されていたものと思われる。もちろん、各領域の間に往来がまったくなかったわけではなからうが、領域の分断が物質文化の多様な地域性に現われていても何ら不自然はない。土器の多様性は、まさにシリア＝キリキア地域の地勢的な複雑さを反映しているのはなからうか。

もちろん、微細な属性の違いを突き詰めていけば、一遺跡はおろか1点の土器にいたるまで際限なく細分できてしまうのが分類の理ではあるので、ひるがえって共通性に着目してみよう。上にあげた地域で共通してみられる際立った特徴には、ルージュ盆地で得られた土器の変遷観を敷衍してみても大きな矛盾が見出されないことに加えて、土器新石器時代を通じて一貫した、土器アセンブリッジにおける暗色磨研土器の圧倒的な卓越性がある。つまり、暗色磨研土器の属性変化と土器アセンブリッジ全体の変化の双方がおおむね共通している。暗色磨研土器の伝統だけでなく、アセンブリッジ全体として、どのような土器をどれだけ製作・消費するのか、あるいはどのような土器をどのような用途に利用するのか、などといったことまでを含めて、総合的な土器伝統を同じくしていたと考えられる。シリア＝キリキアグループがアムーク平原の出土資料を標準資料として設定された以上、その資料が含まれるこの土器伝統こそが、やはりシリア＝キリキアグループに固有の土器伝統ということになる。

キリキア地域では、ユムクテベ遺跡の例が示すように、ある時期には暗色磨研土器が土器アセンブリッジの主体を占めていたが、同遺跡でもその後は急激に衰退してしまうし、他に暗色磨研土器が主体をなす土器アセンブリッジを見出すことはできない。したがって、暗色磨研土器だけに限った一時的な類似性はあるにせよ、アムーク平原やルージュ盆地などとは土器伝統が根本的に異なっていたと考えるべきである。少なくとも土器にかんしては、もはやシリア＝キリキアの「シリア」と「キリキア」の語は結びつかず、それぞれ別の地域性をもっていたと解釈したい。

ハマヤタルトゥースの近郊以南においても、シール遺跡で明らかにされたように、暗色磨研土器を鍵としたルージュ盆地やアムーク平原などとの類似性は、土器アセンブリッジ全体からみれば部分的かつ一時的なものでしかない。キリキア地域と同様、ルージュ盆地周辺とは明らかに別の土器伝統に属する。これらの地域の「暗色磨研土器」にはアムーク平原やルージュ盆地にはみられない、縄文などの特異な装飾が発達していることもあるので、本来はシリア＝キリキアグループに特徴的な土器である固有名詞としての暗色磨研土器ではなく、別種の暗色系でミガキ調整された土器、とすべきなのかもしれない。あるいは、近在する暗色磨研土器の影響が考えられるという意味で、暗色磨研系土器とでも称するべきであろうか。

すなわち、これまでは暗色磨研土器（もしくはそれに似通った土器）の存在が安直にシリア＝キリキアグループへの帰属と結び付けられがちであったが、土器アセンブリッジ全体を見通した場合、それらの遺跡間において必ずしも同一の土器伝統が共有されていたとはいえないのである。

共通の土器伝統は、今のところオロンテス川の下流域とシリア北西部ラタキア県およびイドリブ県だけにしかみられないのだ。ましてや、シリア＝キリキアグループが土器だけでなく物質文化の総体として、つまり考古学的文化として捉えうるのならば、なおさら多角的な同定作業が必要とされ、その語の適用にはさらなる厳正さが求められるはずである。しかし、本論が示してきたのは、シリア＝キリキアグループが一体の考古学的文化としては捉えられず、土器伝統に限ってみても多様な地域性の内包によって瓦解するという実態であった。つまり、シリア＝キリキアグループという概念や定義は、近年になって増加した資料と照らし合わせつつ再考せねばならない。少なくとも、暗色磨研土器の主体的出土を重視するのであれば、その名称から「キリキア」を除外すべきである。あるいは、ジャジーラとは対照的な細かい地域的多様性の存在こそが、このグループを表す一つの特徴であるともいえないかもしれない。いずれにせよ、この問題について本論では土器伝統の地域的多様性を示しただけであるので、今後は物質文化の多角的な検討から取り組んでいく必要がある。

## 6. おわりに

西アジア先史文化全体の流れにおける大きな地域的枠組みの構築を目指し、その一つとしてシリア＝キリキアグループを提唱したブレイドウッドが、広大な歴史的時空間を俯瞰する傑出した構想力を持っていたことに疑う余地はない。また、それを実資料から検証しようと、試行錯誤しつつも真摯に取り組んだ姿勢に深い畏敬を覚える。しかし、その後シリア＝キリキアグループの実態解明や検証作業はほとんど学界に受け継がれず、暗色磨研土器という言葉のひとり歩きを助長してしまった。かつて三宅が指摘したように、「ブレイドウッドは暗色磨研土器の定義を厳密に適用してゆくべきであるとの姿勢を明確にし」ていたわけであるから、「意図とは裏腹」であったはずだ（三宅 1995: 63）。彼が資料的に質・量とも恵まれないなかですら取り組んでいたように、今や新たな資料を手にした我われは、ふたたびシリア＝キリキアグループの実態を解明し、彼の残した遠大な歴史観を検証すべき時期に来たのではなからうか。本論がそのための一助になることを切に願う。

本稿は日本オリエント学会第50回大会にて発表した内容（小高 2009a）をもとに、その後の知見を加えつつ考察を深めて新たに書き起こした。発表時、ご講評いただいた方がたには深謝申し上げたい。また、テル・アイン・エル＝ケルク遺跡東トレンチおよび2002年までに発掘した中央区の土器資料については、日本側調査団長である常木晃・筑波大学教授の指揮のもと筆者が分析を担当しているが、

最終報告書未刊のため本稿における記述には筆者個人の暫定的な所見が含まれることをお断りしておく。なお、本稿の内容には、文部科学省科学研究費補助金・若手研究(B)(課題番号22720300)および早稲田大学特定課題研究助成費(課題番号2011A-960)による研究成果を含む。

註

- 1) テル・アイン・エル＝ケルク遺跡の北西区および東トレンチのほか、1998年に遺丘北東部のF1区でも試掘が行なわれており、同様の結果が出ている(Tsuneki et al. 1998)。
- 2) テル・エル＝ケルク遺跡2号丘5層で8680 ± 355b.p. (N-6545)の放射性炭素年代測定値が得られているが、これはあまりにも年代が古すぎ、先土器新石器時代B期にあたる同10層で8070 ± 275b.p. (N-6548)という妥当な値が出ていることから、信頼に足らない(Iwasaki and Tsuneki eds. 2003: 193-194)。
- 3) テル・アイン・エル＝ケルク遺跡中央区の層位については、出土資料の検討から既刊の概報における記述(Tsuneki et al. 1997, 1998, 1999, 2000)を修正せねばならないことが判明している。ただし、2002年までに発掘を終えた範囲は大きく三つの時期に分かれるため、本稿では上層から順にI期、II期、III期と表記する。
- 4) エル＝ルージュ2c期とされる層位からもごくわずかにクリーム土器が出土しているが、上方からの攪乱による混入の可能性を否定できない。
- 5) Balossi 2004に示されている放射性炭素年代測定値は、そのほとんどがCaneva and Sevin eds. 2004にも掲載されている。しかし、同一の試料でも帰属する層位の記述が異なる場合がある。その理由は不明だが、本稿ではユムクテベ遺跡出土の土器について前者に拠った部分が多いため、帰属層位についても前者に従った。

参考文献

Arimura, M., N. Balkan-Atli, F. Borrell, W. Cruells, G. Duru, A. Erim-Özdoğan, J. Ibáñez, O. Maeda, Y. Miyake, M. Molist and M. Özbaşaran 2000 A New Neolithic Settlement in the Urfa Region: Akarçay Tepe, 1999. *Anatolia Antiqua* 8: 227-255.

Balossi, F. 2004 New Data for the Definition of the DFBW Horizon and Its Internal Developments. The Earliest Phases of the Amuq Sequence Revisited. *Anatolica* 30: 109-149.

Balossi-Restelli, F. 2006 *The Development of 'Cultural Regions' in the Neolithic Near East: the 'Dark Faced Burnished Ware Horizon.'* BAR International Series 1482. Archaeopress, Oxford.

Bartl, K., A. Haidar, O. Nieuwenhuys and D. Rokitta 2008 Šir -Ein neolithischer Fundplatz am mittleren Orontes. Vorläufiger Bericht über die Ergebnisse der Testkampagne Herbst 2005 und Grabungskampagne Frühjahr 2006. *Zeitschrift für Orient-Archäologie* 1: 54-88.

Bartl, K., A. Haidar and O. Nieuwenhuys 2006 Shir: a Neolithic Site in the Middle Orontes Region, Syria. *Neo-Lithics* 1/06: 25-27.

Braidwood, R. J. 1940 Report on Two Sondages on the Coast of Syria, South of Tartous. *Syria* 21: 183-221.

Braidwood, R. J. 1954 A Tentative Relative Chronology of Syria from the Terminal Food-gathering Stage to ca. 2000 B.C. In R. W. Ehrich (ed.), *Relative Chronologies in Old World Archaeology*, 34-41. The University of Chicago Press, Chicago.

Braidwood, R. J. 1955 The Earliest Village Materials of Syro-Cilicia.

*Proceedings of the Prehistoric Society* 8: 72-76.

Braidwood, R. J. and L. S. Braidwood 1953 The Earliest Village Communities of Southwestern Asia. *Journal of World History* 1: 278-310.

Braidwood, R. J. and L. S. Braidwood (eds.) 1960 *Excavations in the Plain of Antioch I: the Earlier Assemblages Phases A-J.* The University of Chicago Oriental Institute Publications 61. The University of Chicago Press, Chicago.

Breniquet, C. 1995 La stratigraphie des niveaux préhistoriques de Mersin et l'évolution culturelle en Cilicie. *Anatolica Antiqua* 3: 1-31.

Caneva, I. and V. Sevin (eds.) 2004 *Mersin-Yumuktepe: a Reappraisal.* Dipartimento di Beni Culturali, Università degli Studi, Lecce.

Contenson, H. de 1982 Les phases préhistoriques de Ras Shamra et de l'Amuq. *Paléorient* 8/1: 95-98.

Collon, D., C. Otte, M. Otte and A. Zaqqouq 1975 *Sondages au flanc sud du tell de Qal'at el-Mudîq.* Fouilles d'Apamée de Syrie, Miscellanea, Fascicle 11. Bruxelles.

Contenson, H. de 1992 *Préhistoire de Ras Shamra: les sondages stratigraphiques de 1955 à 1976.* Ras Shamra-Ougarit VIII, Paris, Éditions Recherche sur les Civilisations.

Contenson, H. de 2000 *Ramad: Site néolithique en Damascène (Syrie). Aux VIII<sup>e</sup> et VII<sup>e</sup> millénaires avant l'ère Chrétienne.* Bibliothèque archéologique et historique 157. Institut Français d'archéologie du Proche-Orient, Beyrouth.

Copeland, L. and F. Hours 1987 The Halafians, Their Predecessors and Their Contemporaries in Northern Syria and the Levant: Relative and Absolute Chronologies. In O. Aurenche, J. Evin and F. Hours (eds.), *Chronologies in the Ancient Near East: Relative Chronologies and Absolute Chronology, 16,000-4,000B.P.*, 401-464. BAR International Series 379. BAR, Oxford.

Faura, J. -M. and M. Le Mièrre 1999 La céramique néolithique du haut Euphrate Syrien. In G. Del Olmo Lete and J. -L. Montero Fenollós (eds.), *Archaeology of the Upper Syrian Euphrates, the Tishrin Dam Area*, 281-298. Institut del Pròxim Orient Antic, Universitat de Barcelona, Balcelona.

Garstang, J. 1953 *Prehistoric Mersin: Yumuk Tepe in Southern Turkey.* Oxford University Press, Oxford.

Garstang, J., W. J. Phythian-Adams and V. Seton-Williams 1937 Third Report on the Excavations at Sakje-Geuzi, 1908-1911. *University of Liverpool Annals of Archaeology and Anthropology* 24: 119-141.

Goldman, H. (ed.) 1956 *Excavations at Gözülü Kule, Tarsus: from the Neolithic through the Bronze Age.* Princeton University Press, Princeton.

Hole, F. 1959 A Reanalysis of Basal Tabbat al-Hammam, Syria. *Syria* 36: 149-183.

Iwasaki, T. and A. Tsuneki 1996 The Prehistory of the Rouj Basin, Northwest Syria: Preliminary Report. *Anatolica* 21: 143-187.

Iwasaki, T. and A. Tsuneki (eds.) 2003 *Archaeology of the Rouj Basin: a Regional Study of the Transition from Village to City in Northwest Syria, Vol. I.* Al-Shark 2. Department of Archaeology, Institute of History and Anthropology, University of Tsukuba, Tsukuba.

Karul, N., A. Ayhan and M. Özdoğan 2001 1999 Excavations at Mezraa-Teleilat. In N. Tuna, J. Öztürk and J. Velibeyoğlu (eds.), *Salvage Project of the Archaeological Heritage of the Ilisu and Carchemish Dam Reservoirs Activities in 1999*, 162-173. Middle East Technical University/METU Centre for Research and Assessment of the Historic Environment, Ankara.

- Karul, N., A. Ayhan and M. Özdoğan 2002 Mezraa-Teleilat 2000. In N. Tuna and J. Velibeyoğlu (eds.), *Salvage Project of the Archaeological Heritage of the Ilisu and Carchemish Dam Reservoirs Activities in 2000*, 130-141. Middle East Technical University/METU Centre for Research and Assessment of the Historic Environment, Ankara.
- Karul, N., A. Ayhan and M. Özdoğan 2004 2001 Excavations at Mezraa-Teleilat. In N. Tuna, J. Greenhalgh and J. Velibeyoğlu (eds.), *Salvage Project of the Archaeological Heritage of the Ilisu and Carchemish Dam Reservoirs Activities in 2001*, 89-106. Middle East Technical University/METU Centre for Research and Assessment of the Historic Environment, Ankara.
- Le Mière, M. 1989 Clay Analyses of the Prehistoric Pottery: First Results. In P. M. M. G. Akkermans (ed.), *Excavations at Tell Sabi Abyad: Prehistoric Investigations in the Balikh Valley, Northern Syria*, 233-235. BAR International Series 468. BAR, Oxford.
- Le Mière, M. and O. Nieuwenhuys 1996 The Prehistoric Pottery. In P. M. M. G. Akkermans (ed.), *Tell Sabi Abyad: the Late Neolithic Settlement*, 119-284. Leiden, Netherlands Historisch-Archaeologisch Instituut te Istanbul.
- Masuda, S. and S. Sha'ath 1983 Qminas, the Neolithic Site near Tell Deinit, Idlib (Preliminary Report). *Les Annales Archéologiques Arabes Syriennes* 33: 199-231.
- Mathias, V. T. and P. J. Parr 1989 The Early Phases at Tell Nebi Mend: a Preliminary Account. *Levant* 21: 13-29.
- Matthers, J. (ed.) 1981 *The River Qoueiq, Northern Syria, and its Catchment: Studies Arising from the Tell Rifa'at Survey 1977-79*. BAR International Series 98. BAR, Oxford.
- Mellaart, J. 1981 The Prehistoric Pottery from the Neolithic to the Beginning of E.B. IV (c. 7000-2500B.C.). In Matthers (ed.), 131-325.
- Mellink, M. J. 1956 Neolithic and Chalcolithic Pottery. In Goldman (ed.), 65-91.
- Moore, A. M. T. 1978 The Neolithic of the Levant. Ph.D. dissertation. University of Oxford, Oxford.
- Miyake, Y. 2003 Pottery. In Iwasaki and Tsuneki (eds.), 119-141.
- Nieuwenhuys, O. 2009a The Earliest Pottery of Shir -ca. 6900-6650 cal. BC. In A. Tsuneki (ed.), *International Symposium on the Emergence of Pottery in West Asia: the Search for the Origin of Pyrotechnology. Presentation Summaries*, 8-13. Department of Archaeology, University of Tsukuba, Tsukuba.
- Nieuwenhuys, O. 2009b The Late Neolithic Ceramics from Shir. A First Assessment. *Zeitschrift für Orient-Archäologie* 2: 310-357.
- Odaka, T. 2003 Fine Painted Wares in the Neolithic Northern Levant: the Earliest Evidence from Tell Ain el-Kerkh, the Rouj Basin. *Orient-Express* 2003/3: 80-81.
- Plat-Taylor, J. du, M. V. Seton-Williams and J. Waechter 1950 The Excavations at Sakce Gözü. *Iraq* 12: 53-138.
- Riis, P. J. and H. Thrane 1974 *Sūkās III: the Neolithic Periods*. Publications of the Carlsberg Expedition to Phoenicia 3. København.
- Thuesen, I. 1988 *Hama. Fouilles et recherches de la Fondation Carlsberg 1931-1938: I. The Pre- and Protohistoric Periods*. Nationalmuseet, København.
- Tsuneki, A. 1995 Neolithic and Early Bronze Age Layers of Tell Mastuma: the Results of Sounding at Square 15Gc. *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 16: 75-107.
- Tsuneki, A., J. Hydar, Y. Miyake, S. Akahane, T. Nakamura, M. Arimura and S. Sekine 1997 First Preliminary Report of the Excavations at Tell el-Kerkh (1997), Northwestern Syria. *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 18: 1-40.
- Tsuneki, A., J. Hydar, Y. Miyake, S. Akahane, M. Arimura, S. Nishiyama, H. Sha'baan, T. Anezaki, and S. Yano 1998 Second Preliminary Report of the Excavations at Tell el-Kerkh (1998), Northwestern Syria. *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 19: 1-40.
- Tsuneki, A., J. Hydar, Y. Miyake, M. Hudson, M. Arimura, O. Maeda, T. Odaka and S. Yano 1999 Third Preliminary Report of the Excavations at Tell el-Kerkh (1999), Northwestern Syria. *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 20: 1-32.
- Tsuneki, A., J. Hydar, Y. Miyake, O. Maeda, T. Odaka, K. Tanno and A. Hasegawa 2000 Fourth Preliminary Report of the Excavations at Tell el-Kerkh (2000), Northwestern Syria. *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 21: 1-30.
- Tsuneki, A., J. Hydar, T. Odaka and A. Hasegawa 2007 *A Decade of Excavations at Tell el-Kerkh, 1997-2006*. Tsukuba, Department of Archaeology, University of Tsukuba.
- 岩崎卓也・西野 元 (編) 1991『エル・ルージュ盆地における考古学的調査Ⅰ』筑波大学シリア考古学調査団報告1 筑波大学歴史・人類学系。
- 岩崎卓也・西野 元 (編) 1992『エル・ルージュ盆地における考古学的調査Ⅱ』筑波大学シリア考古学調査団報告2 筑波大学歴史・人類学系。
- 岩崎卓也・西野 元 (編) 1993『エル・ルージュ盆地における考古学的調査Ⅲ』筑波大学シリア考古学調査団報告3 筑波大学歴史・人類学系。
- 小高敬寛 2003「北シリア新石器時代における土器装飾の変遷－ルージュ盆地とバリフ川流域を例に－」『西アジア考古学』4号 55-66頁。
- 小高敬寛 2009a「西アジア新石器時代における暗色磨研土器の地域性」『オリエン』51巻2号 155-156頁。
- 小高敬寛 2009b「シリア、テル・アイン・エル・ケルク遺跡東トレンチの調査」『オリエン』51巻2号 200-201頁。
- 常木 晃 1993「エル・ルージュ盆地の編年試案」岩崎・西野 (編) 63-69頁。
- 常木 晃 2007「テル・エル・ケルク遺跡からみた北西シリアの新石器時代編年」『西アジア考古学の編年－日本の考古学調査団からのアプローチ－』日本西アジア考古学会十周年記念連続シンポジウム発表資料集 86-91頁 日本西アジア考古学会。
- 三宅 裕 1995「西アジア暗色磨研土器の研究 (Ⅰ)」『筑波大学先史学・考古学研究』6号 59-77頁。
- 三宅 裕 1997「西アジア暗色磨研土器の研究 (Ⅱ)」『筑波大学先史学・考古学研究』8号 31-60頁。

小高 敬寛

早稲田大学高等研究所

Takahiro ODAKA

Waseda Institute for Advanced Study,

Waseda University

